和's YAMATO（わずやまと）

2025
夏号

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」
蔦屋重三郎の卓越した手腕

- 歌麿の登場と多色摺り錦絵の隆盛
- 歌麿は蔦屋の看板絵師となる
- 美人画の浮世絵師　鳥居清長
- 歌麿の代表作　美人大首絵
- 田沼政権の終焉
- 「べらぼう」全体相関図と主な登場人物
- 郷土史跡めぐり
  県史跡・金井製鉄遺跡（群馬県渋川市）
- 群馬の芸術家　島崎庸夫
- 地域・世代間の交流を促進する健康増進施設
  ゆーばる ひざこ（健康福祉センター東楽園）
- 写真で楽しむ美しい自然「嬬恋村バラギ湖の睡蓮」

「風をかけて」オオバギボウシとシオカラトンボ　須藤和之 画

写真で楽しむ 美しい自然

『嬬恋村バラギ湖の睡蓮』2022年6月撮影

《撮影》藤重朋紀氏

略歴
1952　群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971　群馬県渋川高等学校卒業
1972　東京写真専門学校中退
1979　コマーシャルフォトスタジオ創美社
2001　フリー
2010　写真集「上州路·一本桜」
2011　写真集「上州路」

表紙の絵
「風をかけて」オオバギボウシとシオカラトンボ《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業　2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了　2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得　博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展（画廊翠巒）（同2011～24）　2011年 中央電機商会カレンダー原画（2011～24）　2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作　2014年 個展（日本橋三越本店）（同2017,20,23）
2017年 群馬県展 県知事賞　2016年 個展（株式会社ヤマト）
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品　2020年 上毛芸術文化賞受賞　2022年 個展（株式会社ヤマト）
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作　現在 日本美術院院友 群馬県美術会会員 慶應義塾大学非常勤講師（2013～24）
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET　URL http://sutooo.net/

和's YAMATO わずやまと
2025年夏号（第65号）

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO初春号　2025年（令和7年）6月発行
発行：株式会社ヤマト広報室　群馬県前橋市古市町118　TEL.027-290-1891　FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト
【発行】株式会社ヤマト　〒371-0844 群馬県前橋市古市町118　TEL：027-290-1800（代）　FAX：027-290-1896
支　店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、青森
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ　https://www.yamato-se.co.jp/

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」

蔦屋重三郎（Tsutaya Juzaburo）の卓越した手腕

蔦屋重三郎は江戸時代の安永元年（1772）に、浅草・吉原で貸本屋を開業し、わずか10年ほどで江戸の出版界をリードする地位を固め、才能のある作家や絵師を発掘し、「江戸のメディア王」、「江戸文化のプロデューサー」と称されるようになる。世襲による既得権益の継承が主流の時代に、一代での劇的な躍進の背景には、田沼意次による経済活性化策と社会の自由化がある。重三郎はその時流に乗って出版メディアの新たな企画を連発し、江戸文化をけん引したのだった。

出生地は江戸、川越、京都など諸説ある。幼少期の名前は勇助で、町人・農民の家に生まれたのか、武士の家に生まれたのか、その出自は定かではない。少年の頃、浮世絵師の鳥山石燕に入門して狩野派の絵を学んだ。石燕は妖怪図を得意とした絵師で、門人には恋川春町、歌川派の祖となる歌川豊春たちがいた。

歌麿のデビュー作は、明和7年（1770）に出版された歳旦帳『ちよのはる』の挿絵である。歳旦帳とは、歳旦（元旦）や歳暮の俳句を集めたもので、俳諧の宗匠などが一門の発句を取りまとめて発刊した。歌麿の当時の画号は「石要」で、その後は「北川豊章」の画号で、黄表紙の挿絵を数多く描く。

歌麿がデビューした明和年間（1764～72）は、多色摺りの浮世絵木版画である錦絵が誕生した頃であった。浮世絵は墨一色の墨摺りからはじまり、時代が下ると、紅を中心に彩色した紅絵、墨の面に漆のような光沢を持たせた漆絵が登場する。その後、三、四色を摺る紅摺絵が開発され、

狂歌絵本「潮干のつと」（潮干狩りのみやげ）喜多川歌麿 画　出典：国立国会図書館デジタルコレクション

本書は安永から寛政にかけて蔦屋重三郎が刊行した狂歌絵本の代表的なもので、当時の最高水準の技術を駆使して制作された華美で贅沢な作品。

歌麿の登場と多色摺り錦絵の隆盛

蔦屋重三郎は浮世絵師、戯作者など文化人を多数世に出したが、浮世絵師の代表格は喜多川歌麿と東洲斎写楽が双璧である。特に歌麿は、蔦屋の主力作品となった狂歌絵本や黄表紙の挿絵も数多く手がけており、重三郎の出版活動において無くてはならない存在だった。歌麿の生年は不詳で、一説には宝暦3年（1753）に生まれたとされ、重三郎より3才年下だった。

さらに七、八色もの豊富な色を費やした多色摺りへと発展した。錦絵草創期の浮世絵師と言えば、美人画の作品で知られる鈴木春信だ。美人画とは女性の美しさを強調して描いた絵のことで、春信は盛り場の水茶屋で給仕する看板娘を描いて人気を博した。一連の春信作品の人気を受けて、浮世絵師は錦絵に続々と進出する。歌麿もその一人だった。

歌麿は蔦屋の看板絵師となる

歌麿の名前がはじめて登場するのは、天明元年（1781）春に重三郎が出版した黄表紙「身貌大通神略縁起（みなりだいつうじんりゃくえんぎ）」である。同書の作者は石燕門下でありながら文才を発揮した志水燕十で、同門ということで挿絵を担当したと考えられる。歌麿にとって、重三郎との最初の仕事だった。

当時、重三郎が頼りにしていた浮世絵師といえば北尾重政であった。版元としての第一作目「遊女評判記・一目千本」以来、蔦屋の出版物の挿絵を数多く手がけた。

錦絵で一世を風靡した春信が明和7年にこの世を去ったため、重三郎がデビューした頃の浮世絵界は重政と勝川春章が牽引していた。安永5年（1776）、重三郎は日本橋の版元である山崎金兵衛と共同で、重政と春章の合作「青楼美人合姿鏡（せいろうびじんあわせすがたかがみ）」を出版した。吉原の遊女たちの艶姿を描いた錦絵本で、重三郎の初期出版物のなかでは評価が高い作品である。

浮世絵界を牽引する二人のうち、重三郎は重政との関係が深く、弟子の政演（まさのぶ）（戯作者名は山東京伝）にも黄表紙などの挿絵を依頼した。歌麿は重政のもとにも出入りしており、その弟子同然だったという。重三郎は歌麿の才能を見抜いていたが、当初は歌麿よりも政演の方を評価していた。大ヒットした天明6年（1786）出版の「吾妻曲狂歌文庫（あずまぶりきょうかぶんこ）」は、重三郎にとり最初の多色刷りの狂歌絵本で、絵師として白羽の矢を立てたのは政演である。翌年の「古今狂歌袋（ここんきょうかぶくろ）」でも、同じく政演を起用した。

一方、同じ天明6年に出版した『絵本江戸爵』では歌麿を起用したものの、これは墨摺りの狂歌絵本であり、錦絵ではなかった。翌年の『絵本詞の本』の挿絵も歌麿に担当させたが、同じく墨摺りだった。歌麿には錦絵に挑戦させなかったことに、画才では政演の方が上という重三郎の評価が透けてくる。

ところが、天明8年以降の狂歌絵本については、政演に挿絵を依頼することはなく、歌麿が挿絵を独占的に担当している。なかでも、『潮干のつと』や『画本虫撰（がほんむしえらみ）』といった多色刷りの錦絵は歌麿の評価を上げた。歌麿は政演に代わり、重三郎の出版物ではメインの絵師として絵筆をふるうのである。

高名美人六家撰・難波屋おきた　喜多川歌麿 画

（こうめいびじんろっかせん・なにわやおきた）出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

江戸で名高かった6人の美女を描いたシリーズの1つ。

美人画の浮世絵師 鳥居清長

鳥居清長は歌麿と同年代で、宝暦2年（1752）に書店を営む関口市兵衛の子として本材木町（現中央区日本橋）に生まれた。鳥居家三代目当主清満の門に入った清長は、明和4年（1767）にデビューし、安永年間（1772～81）は鳥居派の御家芸であった役者絵を主に発表した。役者絵とは歌舞伎役者を描いた浮世絵のことである。ところが、安永後期からは美人画に力を入れるようになる。その作品は大変な人気を博し、清長は美人画の第一人者として名声を得た。浮世絵に加えて黄表紙の挿絵も描いたが、その画才を二代目の西村屋与八は高く評価していた。

西村屋与八は江戸を代表する地本問屋の一人で、重三郎とは浅からぬ因縁を持つ鱗形屋孫兵衛の次男に生まれ、西村屋に養子に入った人物だった。清長の美人画を数多く出版したことで知られた西村屋は、安永9年に十種もの黄表紙の挿絵を依頼している。かたや、歌麿には四種の黄表紙の挿絵を依頼した。歌麿は重三郎との関係が語られることが多いが、画才に注目したのは与八の方が先である。

しかし、依頼した黄表紙の数が示すように、西村屋は清長の方を高く評価していた。清長に密かに対抗心を燃やす歌麿としては面白くなかったはずだ。天明年間（1781～89）に入ると、西村屋からの仕事が途絶えていく。西村屋と縁遠くなった歌麿は重三郎の庇護のもと実績を積むことになる。浮世絵の市場にも本格的に参入しようとはかる重三郎にとり、その前に立ち塞がっていたのが清長を擁する西村屋だった。これに対抗すべく、その尖兵として大いに期待を寄せたのが歌麿なのである。

飛鳥山花見 鳥居清長 画 出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

手前には清長が得意とした8等身の健康的な美人や子供たちを、後方には桜の名所として知られる飛鳥山を描く。

歌麿の代表作 美人大首絵

清長の美人画の特徴は、江戸の名所を背景に長身で健やかな八頭身の女性を大判（縦39㎝、横26㎝）のサイズで描いたことにあった。その作風は清長風と呼ばれた。明治に入ると、清長が描いた美人画の女性は天明のヴィーナスとまで称されるほど高い評価を得る。重三郎は手塩にかけた歌麿を擁して浮世絵のマーケットに参入するが、当初は劣勢だった。清長に比べれば、知名度が落ちることは否めず、さらに技量的にも及ばないと思ったのかもしれない。よって、天明六年以降は狂歌絵本などの挿絵を数多く描かせることで歌麿の画才を磨く戦略を取る。重三郎の期待通り、歌麿の狂歌絵本は好評をもって迎えられ、その評価は高まる。それだけ、画才が磨かれた。

その上で重三郎は歌麿に美人画を描かせたが、ある工夫を施している。勝川派の役者絵で用いられた「大首絵」の手法を取り入れさせた。大首絵とは人物の上半身を大きく描くとともに、その顔の表情を特に強調して描いた作品である。全身像で一世を風靡した清長の美人画とは、まさに対照的な構図だった。清長が女性を無表情に描いたのに対し、歌麿は性格や心情などの内面が滲み出るように描いており、その点でも対照的であった。こうして、歌麿は重三郎との共同作業により美人大首絵という新たな浮世絵のジャンルを編み出し、大きな反響を呼ぶ。これが決め手となって、重三郎は清長を擁する西村屋とのマーケット争いに勝利した。歌麿も清長に代わって、美人画の第一人者へと躍り出る。浮世絵でも重三郎はプロデュース力を発揮した。そして、浮世絵師喜多川歌麿の名前を不朽のものとしたのである。

主要参考文献：「蔦屋重三郎と田沼時代の謎」安藤優一郎著
文：木下直也

蔦屋重三郎関係年表

寛延3年（1750）	1才	1月7日：吉原で生まれる。父は丸山重助と母は広瀬津与
宝暦10年（1760）	11才	5月：徳川家治が10代将軍となる
		前将軍家重の御側御用取次田沼意次、引き続き家治の御側御用取次を勤める
明和4年（1767）	18才	7月：意次、側用人に昇進
明和6年（1769）	20才	8月：意次、老中格に昇進
明和9年・安永元年（1772）	23才	1月：意次、老中に昇格。この年、吉原大門口の五十間道で書店耕書堂を開店。
安永2年（1773）	24才	この年、吉原細見の販売を開始
安永3年（1774）	25才	7月：遊女評判記『一目千本』（最初の出版物）を刊行
安永4年（1775）	26才	7月：吉原細見の出版を開始
安永6年（1777）	28才	この年、富本節正本・稽古本を出版できる株を取得
安永9年（1780）	31才	この年より、黄表紙、洒落本、往来物の出版を開始
天明元年（1781）	32才	閏5月：一橋治済長男豊千代（後の家斉）、将軍継嗣となる
		12月15日：意次嫡男田沼意知、奏者番に抜擢
天明3年（1783）	34才	7月：浅間山の大噴火
		9月20日：西上野で上信騒動勃発
		9月：通油町の地本問屋丸屋小兵衛店舗と蔵を買い取り、移転。地本問屋の株も入手
		11月1日：意知、若年寄に昇進。この年より狂歌本の出版を開始（後に狂歌絵本も出版）
天明4年（1784）	35才	3月24日：意知、江戸城中で新番佐野善左衛門に斬られる（26日に死去）
天明6年（1786）	37才	6月29日：全国御用金令発令
		8月24日：御用金令、印旛沼干拓工事中止　25日：将軍家治死去　27日：意次、老中辞職
		9月6日：御三家、家治の遺言により幕政に参与（9/7、一橋治済も幕政に参与）
		閏10月5日：意次、2万石減封と謹慎を命じられる
		12月15日：御三家が幕閣に対し、松平定信を老中に推挙（翌年2/28、幕閣は定信の起用を拒否）
天明7年（1787）	38才	4月15日：家斉が将軍職就任
		5月20日：江戸で大規模な米騒動勃発　29日：定信起用に反対する御側御用取次横田準松罷免
		6月19日：定信、老中首座に就任
		10月2日：意次、二万七千石没収、隠居、蟄居謹慎を命じられる
天明8年（1788）	39才	1月：朋誠堂喜三二『文武二道万石通』出版
		7月24日：意次死去（享年七十）
寛政元年（1789）	40才	1月：恋川春町『鸚鵡返文武二道』出版
		7月：春町死去
寛政2年（1790）	41才	5月：町奉行所が書物問屋仲間に出版取締令を布告
		10月：町奉行所が地本問屋仲間に行事を置くことを命じる
寛政3年（1791）	42才	3月：書物問屋仲間に加入。出版取締令違反により山東京伝の洒落本『仕懸文庫』など三冊が絶版。京伝は手鎖五十日、重三郎と行事二人は身上に応じた重過料の判決が町奉行所で下る
寛政4年（1792）	43才	5月：林子平の『三国通覧図説』、『海国兵談』が絶版、子平は仙台での蟄居
		版元の須原屋市兵衛は過料30貫文、行事は過料10貫文の判決が町奉行所で下る
寛政5年（1793）	44才	7月23日：定信、老中退任　8月、美人画でモデルの名前を書き入れることが禁止
寛政6年（1794）	45才	5月：東洲斎写楽の役者絵を大量に出版（～翌年1月）
寛政7年（1795）	46才	3月25日：伊勢松坂に赴き国学者本居宣長と対面
寛政8年（1796）	47才	8月14日：美人画で判じ絵を書き入れることが禁止。秋、脚気が重くなり病の床に就く
寛政9年（1797）	48才	5月6日：重三郎病没。山谷の菩提寺正法寺に葬られる

田沼政権の終焉

将軍家治の厚い信任を得て、明和9年（1772）に老中に就任し、権勢を振るった田沼意次だったが、天明4年（1784）に嫡男の意知が江戸城内で斬られて死亡したことをきっかけに、天災、凶作による社会不安、将軍の死などが重なり、田沼政権の継続に暗雲が立ち込める。

意知の不慮の死は、それまで鬱積していた田沼政権への不満を爆発させる導火線となる。意次が推進した新たな財源確保や新規事業は、不利益を被る人々の強い反発を招き、撤回を余儀なくされるものが少なくなかった。これらの事業の裏では賄賂が横行したため、政治不信を増長させることにもつながった。また、意次自身が一代で幕府の頂点に上り詰めた成り上がり者であったことも、周囲の妬みを買い、反感を増幅させる要因となっていた。

天明期に入ると、天変地異が相次ぎ、特に天明の大飢饉による米価高騰は深刻な社会不安を引き起こした。幕府が効果的な対策を打ち出せないことへの不満も加わり、政治不信は一層深まりをみせる。天明6年（1786）に入ると、関東地方を襲った大雨による洪水が、一旦は落ち着いていた米価をはじめとする物価の再高騰を招く。この洪水は農作物に壊滅的な被害を与え、翌年まで続く米価高騰の要因になるとともに、田沼政権の肝煎りであった印旛沼干拓計画に致命的な打撃を与えた。利根川の氾濫により、築堤が決壊し、多額の資金が投入された干拓地は水没、計画は白紙となってしまう。資金調達の見込みが立たず、幕府は工事の再開を断念することになる。

印旛沼干拓計画の中止という大打撃に加え、天明6年6月に田沼政権は新たな政策で更なる猛反発を招き、窮地に追い込まれる。それは、全国の町人、農民、寺社・山伏に対し、御用金の拠出を命じる政策だった。町屋敷の間口一間につき銀三匁、所持地百石につき銀二十五匁を5年間徴収し、集めた資金を諸大名への貸付に充てるという計画だ。この政策は、全国の民衆には新たな税負担と受け止められ、各地で激しい反発が起こったため、幕府は同年8月に御用金の徴収中止を布告する。度重なる政策の撤回で、わけても御用金の失策は田沼政権の基盤を大きく揺るがすこととなり、意次の政治責任を問う声が幕府内で高まることとなる。

窮地に立たされた意次だったが、その劣勢を挽回するための大きな後ろ盾があった。それは厚い信任を受けていた家治の存在である。しかし、その家治が病に倒れるという一大事が起こった。意次にとって、家治には何としても回復してもらわなければならない。将軍の治療にあたるのは奥医師に限られていたが、一向に快方の兆しが見えないことから、意次は焦燥感を募らせ、側用人を兼ねる老中という立場を利用し、治療にあたる奥医師を交代させる。ところが、交代した医師が調合した薬を服用した家治の病状は急激に悪化し、家治は回復することなく、8月25日に死去する。

診断ミスかどうかは不明だが、意次が推薦した医師の投薬が家治の急死を招いたことは、意次への批判を激化させた。意次が毒を盛ったという噂まで流れ、政権内部からも意次の責任を追及する声が強まる。御用金政策の撤回で既に立場が弱まっていた意次は、家治の死と自身が推薦した医師の件で、進退窮まる状況に追い込まれる。家治の病状が悪化した頃から、意次は病気を理由に登城していなかった。周囲からの勧めで登城を控えていたのだが、その間に老中辞職を求める圧力が強まる。意次は抵抗を続けたが、最終的には抗しきれず、病気を理由に辞職を申し出る。8月27日、意次の名代として西尾忠移と松平信志が江戸城に呼び出され、老中水野忠友から辞職願の受理と御役御免が言い渡された。しかし、その2日前に家治は既に亡くなっており、辞職を許可したのは大老井伊直幸と他の老中・若年寄たちだった。意次にとっては、これまで引き立ててきた田沼派の老中たちに裏切られたことになる。

同日、意次と姻戚関係にあった将軍側近の稲葉正明も罷免され、田沼派の粛清が始まった。意次が老中を辞職勧告された理由は、御用金政策の失敗に象徴されるように、幕政の混乱に対する政治責任を取らせることにあった。同僚の老中たちは、意次一人に責任を負わせることで、自身への責任追及を逃れようとしたのだった。意次が辞職すると、同僚の老中たちの態度は一変する。意次の次男を養子に迎え老中に昇りつめた水野忠友は、養子縁組を解消してしまう。娘を意知に嫁がせた松平康福も意次との交際を断つと幕府に届け出た。これらは、意次との関係を続けることが自身の立場を危うくすると考えた自己保身によるものとみることができる。

この段階では、意次は病気を理由に老中を辞職しただけで、処罰されたわけではなかった。しかし、幕閣は政治責任を明確にするため、意次の処罰を決定する。同年閏10月5日、幕府は意次に対し、在職中に加増された二万石の没収と謹慎を命じ、神田橋の上屋敷と大坂の蔵屋敷も没収された。同日には、意次の下で財源確保や新規事業を推進してきた勘定奉行松本秀持も罷免され、田沼主導の幕政に誤りがあったことが幕閣によって認められた。

こうした処罰の裏には、徳川一門からの強い申し入れがあったとされている。意次の失脚後、幕府内では激しい権力闘争が勃発し、半年以上にも及ぶ政争が繰り広げられることになる。

神田橋

蔦屋重三郎も恩恵を受けた江戸経済の発展を導いた田沼意次。屋敷は現在の神田橋付近にあった。意次は、江戸幕府の老中として積極的な経済政策を推進し、商業の発展を促した。その風潮に背中を押されるようにして、蔦屋重三郎は数々のヒット作を世に生み出す。

所在地：東京都千代田区内神田1丁目～大手町1丁目

主要参考文献：「蔦屋重三郎と田沼時代の謎」安藤優一郎著

文：木下直也

田沼意次像（牧之原市資料館）
写真提供：静岡県観光協会

静岡県牧之原市には、田沼意次が城主を務めた江戸時代中期に創建された遠州相良（えんしゅうさがら）城があった。意次の失脚とともに破却されてしまったが、城址や城下町には、意次の功績を伝える遺構や、相良城や田沼家ゆかりの品々を保存する寺院が点在している。また、相良城本丸跡に建つ牧之原市史料館には、田沼家の家紋「七曜紋」が入ったゆかりの道具類や関連資料を収蔵、展示している。

牧之原市史料館　住所：〒421-0592　静岡県牧之原市相良275-2　電話：0548-53-2625

2025年 NHK 大河ドラマ べらぼう

蔦重栄華乃夢噺（つたじゅうえいがのゆめばなし）

全体相関図と主な登場人物

（枠内下段は演者）

吉原の人々

大文字屋
蔦重を慕う当代一の花魁
誰袖（たがそで）
福原 遥

松葉屋
松葉屋の女将
いね
水野美紀

大黒屋
女将・吉原の見番
りつ
安達祐実

二文字屋
二文字屋の女将
きく
かたせ梨乃

駿河屋
駿河屋の女将
ふじ
飯島直子

蔦重の育ての親
駿河屋市右衛門（するがやいちえもん）
高橋克実

蔦重の義兄
次郎兵衛
中村 蒼

耕書堂
江戸のメディア王
蔦屋重三郎（つたや じゅうざぶろう）（蔦重（つたじゅう））
横浜流星

蔦重と浮世絵の
美人画を仕掛ける

出版に関わる人々

狂歌師・戯作者・御家人
大田南畝（おおたなんぽ）
桐谷健太

天才絵師
喜多川歌麿（きたがわ うたまろ）
染谷将太

戯作家・絵師
恋川春町（こいかわはるまち）
岡山天音

戯作家・絵師
北尾政演（きたおまさのぶ）
古川雄大

戯作者
朋誠堂喜三二（ほうせいどうきさんじ）
尾美としのり

絵師
北尾重政（きたおしげまさ）
橋本 淳

絵師
鳥山石燕（とりやませきえん）
片岡鶴太郎

彫師
四五六（しごろく）
肥後克広

戯作者
北川豊章（きたがわとよあき）
加藤虎ノ介

絵師
勝川春章（かつかわ しゅんしょう）
前野朋哉

戯作者
唐来三和（とうらいさんな）
山口森広

出版事業を拡大

商業を重視

徳川家 幕臣・諸大名

11代将軍・家斉の“父”
一橋治済（ひとつばし はるさだ）
生田斗真

10代将軍
徳川家治（とくがわ いえはる）
眞島秀和

幻の11代将軍の母
知保（ちほ）の方
高梨 臨

意次との深い絆

幻の11代将軍
徳川家基（とくがわいえもと）
奥 智哉

幕政の改革者
田沼意次（たぬま おきつぐ）
渡辺 謙

松平定信を育てた“母”
宝蓮院（ほうれんいん）
花總まり

大奥総取締
高岳（たかおか）
冨永 愛

勘定組頭
土山宗次郎（つちやまそうじろう）
柳 俊太郎

反田沼“世直し大明神”
佐野政言（さのまさこと）
矢本悠馬

小説「鬼平犯科帳」主人公
長谷川平蔵（はせがわ へいぞう）
中村隼人

田沼意次の嫡男
田沼意知（たぬまおきとも）
宮沢氷魚

田沼意次の側近
三浦庄司（みうらしょうじ）
原田泰造

松前藩主
松前道廣（まつまえみちひろ）
えなりかずき

松前道廣の弟
松前廣年（まつまえひろとし）
ひょうろく

業界最大の〝敵〟

蔦重の永遠のライバル

のちの夫婦

地元問屋・版元

江戸を代表する地本問屋
鱗形屋孫兵衛（うろこがたやまごべえ）
片岡 愛之助

「鱗形屋」の跡取り
鱗形屋長兵衛（うろこがたや ちょうべえ）
三浦獠太

「鱗形屋」の番頭
藤八（とうはち）
徳井 優

「錦絵」の老舗
西村屋与八（にしむらやよはち）
西村まさ彦

書物問屋の大店
須原屋市兵衛（すはらや いちべえ）
里見浩太朗

地本問屋の女将
てい
橋本 愛

京ゆかりの地本問屋
鶴屋喜右衛門（つるや きえもん）
風間俊介

協力・友好関係
ライバル対立関係
血縁関係
婚姻関係

郷土 史跡めぐり〈群馬県渋川市金井〉

県史跡・金井製鉄遺跡

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　専門員　松澤樹生

はじめに

「金」という文字をみてみなさんはどんなことを連想するでしょうか。ゴールド？　お金？　私の場合、「鉄」が頭に浮かんできます。群馬県内には「金山」や「金井」といった「金」がつく地名が多く存在します。もちろん、「金」が採掘できるわけではなく、このような地域では鉄づくりが行われていたという言い伝えがあります。今回は実際に製鉄遺構が発掘調査されている、渋川市の金井製鉄遺跡（県史跡）をご紹介します。

金井の製鉄遺跡

遺跡は渋川市金井にあります。吾妻川右岸の河岸段丘の小河川によって開析された斜面地に立地しています（図1）。

昭和四九年に行われた調査の結果、遺跡の名前の通り、製鉄を行っていたことを示す製鉄炉1基と、炭窯8基（調査は3基）が検出されています。

金井製鉄遺跡で確認された製鉄炉は、「半地下式竪形炉」といって、図2のような形が復元されています。平面形は円形から隅丸方形を基調とし、斜面をうまく利用して半地下式にすることで、炉の高さを稼いでいます。また、炉後背部に設置される踏みフイゴという装置を用いて送風が行われます。このタイプの製鉄炉は、8世紀後半から10世紀にかけて東日本で多く確認され、特に群馬県や福島県で多く検出されています。

では、実際に調査された炉を見てみましょう（写真2・図3）。平面形は円形に近く、内径の長径約九〇㎝、短径五五㎝で、半地下式であることがわかります。踏みフイゴはおそらく調査範囲外に存在すると思われ、検出されていません。年代は8世紀中頃と考えられており、半地下式竪形炉のなかでは最も古い段階のものです。

雨上がりに遺跡周辺を歩いてみると、原料である砂鉄が流れ出ている様子が見られます。また、燃料となる木々は豊富であったことが現在の様子からも容易に想像できます。つまり、遺跡周辺は鉄生産に適した土地であったことがわかります。

周辺の鉄生産関連遺跡

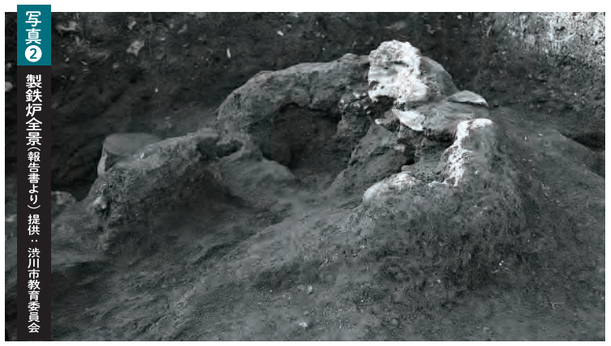
金井製鉄遺跡の周辺には、多くの鉄生産関連遺跡が存在しています。特に近接する金井前原Ⅱ遺跡では半地下式竪形炉が、金井下新田遺跡では半地下式竪形炉に伴う鉄滓（製鉄時に発生する不純物）が確認されており、遺跡周辺で大規模な鉄生産が行われていたことがわかっています。また、やや離れた諏訪ノ木Ⅵ遺跡では、半地下式竪形炉によって作られた鉄を精錬したと考えられる鍛冶の跡が見つかっています。また、時代は異なりますが7世紀末と考えられる鍛冶工房が中筋遺跡で、10世紀と考えられる小形自立炉という製鉄炉が有馬条里遺跡で確認されており、古代の渋川地域では鉄生産が盛んであったことを示しています。

おわりに

製鉄炉は、説明板（写真1）の右手の階段をおりて左手に回ると、保存・展示されています。実物を見学することで、古代鉄生産の一端を実際に感じることができます。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

参考資料
・渋川市教育委員会1975「金井製鉄遺跡発掘調査報告書」
・吾妻川下流域における製鉄遺跡」
・井上唯雄1986「93 渋川金井製鉄遺跡」『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
・井上唯雄1991「第一章 律令体制の展開と上野国 第六節 手工業生産の発展 三 製鉄業」『群馬県史 通史編2原始古代2』群馬県
・笹澤泰史2006「古代上野国群馬郡有馬郷の鉄生産」『研究紀要26』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
・笹澤泰史2016「東日本の古代製鉄技術の展開 ― 箱形炉の導入から竪形炉への変遷 ―」『研究紀要34』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
・笹澤泰史2021「鉄が語る群馬の古代史」みやま文庫

写真❶ 遺跡現況（西から撮影）提供：渋川市教育委員会



写真❷ 製鉄炉全景（報告書より）提供：渋川市教育委員会

↑製鉄遺構は看板の下にある覆い屋の中に保存されている

図1 遺跡位置図（地理院地図淡色地図を使用）

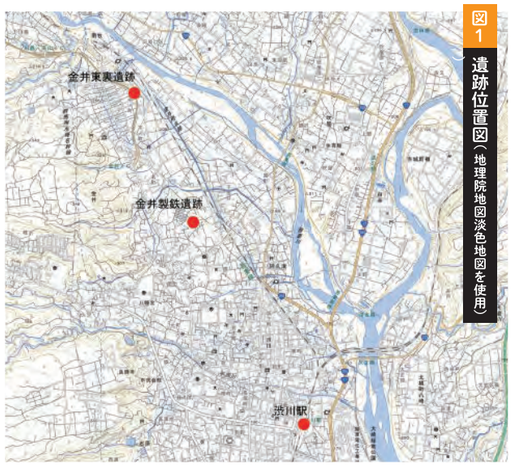


図2 半地下式竪形炉の復元図（笹澤2016より）

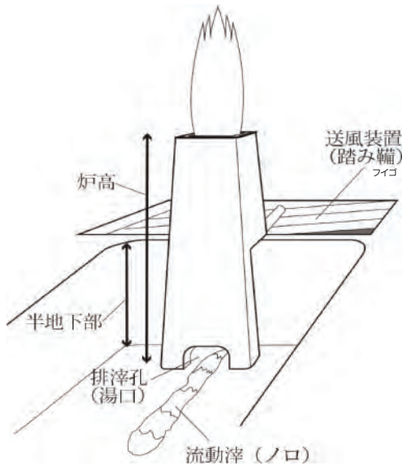


図3 製鉄炉実測図（報告書より）

遺跡までのアクセス（専用駐車場は無し）

- JR渋川駅から関越交通（神田原・祖母島線）のバスで約20分 → 前原団地バス停降車後、徒歩約2分
- 関越交通（青葉台・りんご団地線）のバスで約20分 → 前原で降車後、徒歩約7分

おすすめ

金井東裏遺跡の見学用駐車場を利用し、金井東裏遺跡・金井下新田遺跡、金井製鉄遺跡と歩いて巡るコースがおすすめです。

シリーズ 群馬の芸術家 29

島崎庸夫

絶望と希望が織りなす人間ドラマ

美術研究家 染谷 滋

原子爆弾と燔祭

M三〇〇号（縦一八二㎝、横一九一㎝）の《燔祭》は、二〇〇〇年（平成十二）に制作された大作で、一連の「燔祭」シリーズの一点である。よく似た作品に広島平和記念資料館に収蔵されている同サイズの《黒い雨》（一九九三年）がある。《黒い雨》では母親に抱かれた子どもが描かれているが、《燔祭》では子どもの姿はなく、失ったものを求めて突き出された両手と、天に向って叫ぶ声とが張り詰めた構図を生んでいる。

「燔祭」は古代ユダヤ教で、生け贄の儀式として子羊などを焼き神に捧げることであるが、島崎庸夫はそれを原爆によってわが子を失った母親の姿に重ねて描いた。「記録風のイメージでは単に被爆の様相に惑わされて造形が脆弱になると思った」と島崎は語っている。戦争という人間世界の悪行に対して、贖罪という普遍的なテーマで問いかける、島崎庸夫ならではの作品である。

公園で生まれ、公園を描く

島崎庸夫は一九三三年（昭和八）十二月十五日に高崎市で生まれた。両親が高崎公園内で土産物などを扱う茶屋を経営していて、そこに住まいがあったからだ。今では比較的静かな公園だが、昔はもっと賑やかだったに違いない。サーカス団がテントを張って公演を催したことも幾度かあった。子どもから老人まで、幅広い層が集まる公園は、人間観察の絶好の場所でもあった。

終戦間際の一九四五年四月に旧制高崎中学に入学し、一九五二年三月に新制高崎高校の四回生として卒業した。在学中の一九五〇年三月には、東京都美術館で開催される第九回創元展に、十六歳で公園を描いた作品が初入選している。この創元展が生涯続く島崎庸夫の作品発表の舞台であり続けた。

東京芸術大学の受験に失敗し、小学校に助教として勤めたこともあったが、一年で退職して武蔵野美術学校に入学。「すんなり芸大に合格していたら、そのまま東京に残ったかもしれない」と島崎は人生の岐路を述懐した。

公園の自宅で児童画教室を開いたのもこの時期で、初個展は一九五六年五月に高崎の珍竹林画廊で三日間開いた。創元会の恩師である深谷徹が個展の案内状に一文を寄せ、「決して時流にこびぬ点がこの人の特質であり、大きな骨格を一歩一歩築き上げる努力の人」と記している。

一九五七年三月武蔵野美術学校卒業。高崎市立女子高校をはじめとして、高崎市立第一中学校などの市内の中学四校で美術教師を三十二年間勤めた。

教師時代を島崎庸夫の前半生とすれば、この時期の作品は公園をテーマとしたものが圧倒的に多い。家族や恋人、寂しげな老人や酔っ払いまで、人間社会の様々なドラマが公園にはあった。一輪車に乗った男女の曲芸師シリーズも、高崎公園内でのサーカスが源泉となっている。

創元展だけでなく一九五九年以来、日展にも幾度となく入選した。具象洋画壇の登竜門とされる安井賞展は、そこに出品できるだけでも一流画家の証明と目されていたが、四十代の島崎は公園シリーズ（一度は歩行者天国）が四度選ばれて出品している。この事だけでも実力のほどが知れるだろう。

画壇をリードする後半生

一九九〇年三月、美術教師を退職した島崎はまだ五六歳だったが、県美術会では既に常任理事、創元会でも二年後に理事となっている。

一九九六年十月、あさを社よりエッセイ集『粗忽者の記』を出版。絵筆だけでなく文章でも筆が立った島崎の画文集で、常に物事の二面性を看破するユーモアにあふれた文章と、挿入された多くのエスキスの軽妙さが、見事なハーモニーをみせてくれる名著である。

二〇〇九年には高崎市美術館で代表作を集めた回顧展「島崎庸夫―見る目、生きた手、感ずる心」が開催。公的機関が島崎の実力を認めた証と言えるだろう。

二〇一二年からは県美術会会長に就任。五年間にわたって群馬の美術界のリーダーとして采配をふるった。この間の大きな出来事としては、長年会場の手狭さに苦慮してきた県美術展が、これまでの県立近代美術館の一階展示室だけでなく、二階展示室の一部も会場として使えるようにした事だろう。

二〇一三年高崎市文化賞、二〇一五年群馬県総合表彰、二〇一九年には文化庁が選出する地域文化功労者表彰を受けている。

卒寿を超えいまだ現役

島崎庸夫は現在九十一歳。創元会顧問、県美術会特別顧問と、多忙な役職からは退いたかに見えるが、いまだに現役だ。二三〇号のキャンバスを取り寄せては新作の構想にいとまがない。

世の中から戦争は消えず、時代の不安は増すばかりで、人間をテーマとしてきた画家にはじっとしていられない日々だろう。

近年の作風は人物の変容（デフォルマシオン）が著しく、自由自在の境地ともとれるが、絶望の激しさが人体をねじ曲げているようにも見える。

「デフォルマシオン探索の姿勢とは、自我の内奥にうずくまる強欲・矛盾・悲しみ・失望などを体内発酵させて、デフォルマシオンという鋳型に流し込むということだと思っている。私はこの六十年有余人間にこだわり、人間をテーマに描き続けてきた。そして、この人間描出にデフォルマシオンは欠かせない造形要素として私の構想力をかきたててくれた。」（二〇一八「デフォルマシオン」より）

島崎庸夫の作品と長寿に乾杯。

燔祭　M300

略歴　島崎庸夫 TUNEO SHIMAZAKI

1933　12月15日、高崎市に生まれる。
1950　深谷徹と出会い師事。第9回創元展に初入選。
1952　群馬県立高崎高校を卒業。
1957　武蔵野美術学校を卒業。
　　翌年、高崎市内で教職に就く。
1959　第2回日展（新日展）に初入選。以後81年まで出品。
1960　第19回創元展で会員に推挙。
1963　第14回県美術展で無鑑査推挙。
　　翌年より県美術会会員。
1969　群馬芸術文化協会結成に参加。
1973　安井賞候補展入選（74・75・80年にも）。
1976　ブルガリアのソフィアトリエンナーレ招待出品（79年にも）。
1983　第42回創元展で会員賞受賞。
1986　第45回創元展で文部大臣奨励賞受賞。
1990　高崎市立長野郷中学校を最後に32年間の教職を退く。
1991　高崎市美術館開館記念展「たかさきの美術・今」に出品。
1995　群馬県立近代美術館「群馬の作家たち―」に出品。
1996　あさを社より『粗忽者の記 島崎庸夫エッセイ集』刊行。
2009　高崎市美術館で代表作を集めた回顧展開催。
2012　群馬県美術会会長に就任（～2017）。
2013　高崎市文化賞受賞。
2015　群馬県総合表彰。
2017　画業60周年記念祝賀会（高崎ビューホテル）。
2019　文化庁が選出する地域文化功労者に選ばれる。
2022　画業70年を記念して画集刊行と記念展開催。
現　在　創元会顧問、県美術会特別顧問。

地域・世代間の交流を促進する健康増進施設

ゆーぱる ひざこ（健康福祉センター東楽園）

―さいたま市―

外観

さいたま市は、既存の老人福祉センター東楽園の再整備事業として、令和7年4月1日にゆーぱる ひざこ（健康福祉センター東楽園）をオープンしました。地域・世代間の交流を促進するための健康増進施設で、市民の健康寿命の延伸、生きがいづくりや教養・学習の支援を図ります。ヤマトグループのサイエイヤマトと埼玉ヤマトは、空調・給排水衛生設備工事に携わらせていただきました。

ゆーぱる ひざこ（健康福祉センター東楽園）

所在地　さいたま市見沼区膝子984番地

施設内容　プール、温浴施設、フィットネスルーム、教養娯楽室、音楽室、屋内運動場、集会室、飲食コーナー（レストラン）等

延床面積　4651・77㎡

構造　鉄筋コンクリート造 地上1階建て

高さ　9・585m

施工業者

建築　佐伯・ユーディーケー・カタヤマ特定共同企業体

電気　万代・浦和特定共同企業体

設備　サイエイ・埼玉ヤマト特定共同企業体

温浴施設

プール

体育館

さいたま市建設局建築部
設備課主査（2025年3月末までの所属）　**種村 豪 様**

さいたま市東楽園再整備事業建設（機械設備）工事は、老朽化した老人福祉センター東楽園を隣接する見沼環境センターでごみを焼却した際に発生する余熱を有効活用した温浴施設や温水プールを備えた健康増進施設として再整備するものです。私は、令和5年の4月の人事異動で本工事の監督員を務めることになりました。工事現場は、ほとんど未着手の状態でしたが施設規模が大きいため、工事内容や温浴施設のシステムを把握するのに苦労しました。

サイエイ・埼玉ヤマト特定共同企業体さんは、工事全般について現場の状況を十分に把握し、品質、出来形が高いレベルで施工されており、工事記録についても施工品質が確認できる工事写真や試験・試運転関係の書類が適切に整理されていました。

現場の施工条件に変更があった際の検討・対応も適切に行われており、特に環境センターから供給される温水循環配管については、道路をまたいで環境センターの敷地内まで敷設する必要があり、ルート変更や道路の閉鎖期間などの問題がありましたが、サイエイヤマトさんの提案を受け、管種を温泉・温水用パイプに変更するなど、様々な工夫によって解決することができました。

また、施設管理者の視点で設備機器のメンテナンスに配慮した工夫を随所に行うなど、維持管理がしやすい高品質な施設を完成することができました。

機械室のユニット

機械室

機械室